



近況報告

金沢医科大学腫瘍内科学 教授
安本 和生

2020年3月13日に成立した新型コロナウイルス対策特別措置法に基づく措置で、総理大臣が行う宣言であるコロナ禍緊急事態宣言の1回目が発令され、早1年が経ちました。第一線で感染対策に奮闘していただいている皆さまにこの場をお借りして改めて敬意を表します。先日、ファイザー社製ワクチンの1回目を接種したところです。特に、急性期症状を含め副作用は自覚していません。100万人に5例程度にアレルギー症状が出現するとのこと。外出を控え、どうしても自宅に閉じこもりがちになります。必要な対策でもあると思います。

金沢市は、新幹線の開通でにわかに旅行者が激増しました。しかし、現在コロナの影響で旅行者は激減しています。駅のシンボルマークである「もてなしドーム」(写真1)も皆さんのお越しをお待ちしています(笑)。コロナ禍が峠を越えたら、ぜひまた金沢にお越し下さい。



写真1 金沢駅のシンボル「もてなしドーム」
(写真提供：金沢市)

さて、皆さんは「大樋焼おおひやき」をご存知でしょうか。私自身昔から絵心はありませんが、どうも美しい形、特に流線型のものや美術館をはじめ美術品を見て歩くのが趣味で、このようなコロナ禍でありますので当然外に出て人と接触は避ける、そのような状況の中で、自宅にあるものやネット上で美術品を鑑賞する機会が増えました。

金沢には大樋焼という焼き物があります。十一代大樋長左衛門窯は、石川県金沢市にある、350年以上の歴史と伝統をもつ楽焼の脇窯*です。ここ金沢市橋場町には、ギャラリーと大樋美術館があります。写真2、右手の格子状の作りが大樋ギャラリーで右手に入口があります。大きな2本の松もとても年代物で歴史の深さと情緒を醸し出しています。思わず作品への期待が増します。立地は、浅ノ川(金沢市は浅ノ川と犀川の間に中心部があります)にかかる浅野川大橋や梅の橋(写真3：映画『舞妓 Haaaan!!!』でも有名)の近くで、兼六園や東の茶屋街にもほど近い大変風光明媚な環境にあります。実は、筆者の自宅もこの界隈にあります(余談 笑)。

初代は江戸時代の陶工で、大樋焼を創始。1656年楽家四代目一入に弟子入りし、1666年加賀藩第五代藩主前田綱紀から茶堂として招かれ、裏千家家元・四代目千宗室に同道し加賀藩に赴き、楽焼の脇窯である大樋焼を金沢で始めたとされます。河北郡大樋村で藩

* 脇窯：楽焼の一派。京都の楽本家より分かれて別に新たに一家をなした窯。



写真2 大樋美術館・大樋ギャラリーを併設した大樋長左衛門窯（写真提供：大樋美術館）



写真3 浅野川にかかる梅の橋（写真提供：金沢市）



写真4 九代大樋長左衛門作の大樋黒釉茶盃（左）と飴釉の茶盃（右）

の焼き物御用を務めて、地名から大樋姓を許されたようです。明治維新後、大樋焼は藩の御庭焼の地位を失い民間の窯元として生業を立てざるを得なくなりましたが、大樋自体は昭和の茶陶ブームを契機に茶道愛好家や数奇者（芸道に執心な人物の俗称）などを媒介して全国的に知られるようになりました。

（引用・要約「大樋長左衛門（初代）」フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（<https://ja.wikipedia.org/>）最終更新：2017年5月15日 12:38（UTC）、アクセス日：2021年3月17日（日本時間））

写真4は、九代大樋長左衛門（1901～1986年）の茶盃です。

九代は、四代の時期以降に大樋家で本格的に焼成されるようになった高火度の黒楽茶盃の胴に垂れ幕のように白い斑が生じた漆黒の釉を幕釉と呼んで珍重したようで（写真4左）、黒楽茶盃に独自の境地を深め、特にこの黒幕釉に秀でた陶才を発揮した人物とされています。写真4右は、歴代が特徴とした飴釉（あめぐすりまたはあめぐり）の代表的な茶盃で、こちらも九代作です。どちらも手に取る取まり感やその独特の質

感に感動します。

無為で品位を重んじた作陶家のこうした作品に出会うと、茶盃自体を楽しむ、そこに情緒の深まりを感じずにはおれません。

研究を含め「文化と学問の創造には、美しい情緒が何より大事である」と、大数学者である岡繁（1901～1978年）さんが「春宵十話」という随筆集の中でも述べられています。「国家の品格」を書かれた数学者藤原正彦氏もこの岡先生に深い影響を受けたおひとりであると述べられています。多くのノーベル賞受賞者もまた幼小時大自然の中で生まれ育ったという共通点があると、どこかで読みました。数学や基礎研究の独創には、偉人が語られている美しいものを美しいと素直に感じる無意識の情緒が必要なのかもしれません。岡先生は、情緒の意味を問われ、「野に咲く一輪のスマレを美しいと思う心」とそう答えたそうです。控えめだが芯のある美しさ、その可憐さに美しさを感じ感動する心、そうした無意識な情緒感をこれからも持ち続けまた大切にしていきたいと思います。